

# 海と暮らす。

「沼津の海といえど？」の問いに、皆さんはどのようなイメージを持つでしょうか。日本で一番深い駿河湾。静岡県内で随一の長さを誇る海岸線。そのスケールの大きさから、本市にとって海は暮らしに寄り添う存在であり、海の楽しみ方や海と関わる人のライフスタイルもバラエティに富んでいます。

暦も気温も本格的に夏を迎える7月。皆さんも沼津の海をもっと感じてみませんか。

海と育ったから、おいしい魚を届けたい。

駿河湾の奥に位置する沼津の海では、定置網やまき網漁など様々な方法で漁業を営む漁師がいます。なかでもリアス式海岸に囲まれた近海は、マダイやアジ、ハマチなどの養殖漁場としての好条件が揃っています。

西浦足保でマダイ等の養殖に取り組んでいるマルセイ水産の眞野雄太さんは「この辺りはちょうどよい海水温に加えて、急深になっていることや風が吹いても穏やかなことなどから、養殖に向いているんです。この場所なら、ぶりぶり身の引き締まった美味しい魚が育つ。いい魚を食べてもらって皆さんの食卓をもっと楽しくしたい」と話してくれました。

都内の料亭で食材として使われるほどの美味しさをもった沼津の魚。全国のどこよりも新鮮に、美味しく食べられるのは私たち沼津市民の特権かもしれません。眞野さんが市立図書館近くに構える和食店「眞鯛-MADAI」や内浦漁協直営食堂「いけすや」では漁師が自ら育てた魚のおいしさを直接届けたい、そして、沼津の魚のよさをより多くの人に伝えたいとの想いも込められています。



この先も、この場所で。

江浦湾のほとり、目の前に海が広がる水産加工場跡を自らリノベーションした3階建ての建物で、家具製作に取り組んでいるO.F.Cを主宰する大田貴則さん。都内のカフェやレストランに家具や什器を納めたり、沼津自慢フェスタで使われたテーブルを製作するなど多方面で活躍している家具職人です。

小学生時代から我入道で育ち、高校卒業と同時に上京。イタリ안의料理人を務めたのち、一念発起して家具製作の道へ。独立をきっかけに沼津にUターンし「のびのびと生活できて、気持ちよく商売ができる場所」を探していたところ、取り壊す直前だったというこの場所に偶然出逢ったといいます。

1階が工房で2階は打ち合わせに使うスペース、3階を家族で暮らす住まいとしており「3



人の子どもたちも山形県出身の妻もこの場所が気に入っているんです。地域の人たちにも優しくしてもらっていますし、ストレスのない贅沢な暮らしなので、仕事も捗りますよ」と教えてくれました。



沼津に拠点を置いて10年、大田さんのもとは、現在も都内をはじめ全国からオーダーが集まります。「都内にも通えるし、仕事をするうえでデメリットを感じることはありません。小さな頃から海の見える場所で育ってきたこともあり、海も沼津も大好きなので、できればこの先もこの場所で暮らしを楽しみながら家具をつくってあげたい」と海を眺めながら教えてくれました。